スズカンエネルギーニュース　第８号

～安心・安全のために～

令和６年１月１日
能登半島地震発生

家屋倒壊、火災発生、道路寸断。

過酷な状況の中での被災者の方がおかれた状況の問題点、改善点は何か？

能登半島地震発生　変わり果てた街並み

2024年1月1日 元旦 石川県能登地方で、16時06分震度5強、そして4分後の16時10分、震度7の地震が発生しました。

この辺りの地域(三重県の北部)でも、ぐらりぐらりと気味の悪い揺れを感じました。

思い出されたのは、**29年前の阪神淡路大震災**。嫌な予感が頭をよぎりました。「震源地はどこだろう?大きな被害が出たのだろうか?」

すぐに、地震情報を得ようとテレビのニュース番組を確認、地震がおきてからすぐだったせいか、大きな被害はあまり確認されませんでした。

「阪神淡路大震災と同じ感じで、これから状況がわかってきて大きな被害のニュース入ってくるのではないだろうか?」と感じました。

そして**1日18時頃、輪島市中心部朝市通りで火災発生**。店舗・住宅など２００棟が全焼しました。また、海岸地域では、５ｍ超の**津波**が町を襲いました。

今回の地震の報道で感じたのは、発生直後の被害状況や映像がすぐには報道できていない状況だ、ということでした。**阪神淡路大震災の時**は、**地震発生が朝の5時46**分で、まだ外は日が昇る前であたりは暗い状況でしたので、やはりすぐには情報や映像は伝えられませんでしたが、7時以降のニュースなどでは地元のキャスターやリポーターが自身の出勤途中の映像などを報道していました。また、２０１１年3月１１日の**東日本大震災**は**地震発生が14時46分**の日中でした。津波が襲ってくる、まさしくその状況や、車や自転車、あるいは走って逃げる人々の映像を胸が押しつぶされる思いで固唾を呑んで見守っていた記憶があります。

今回の能登半島地震は、何故、情報が遅いのだろう?と気になりました。

その理由は、**土砂災害、家屋倒壊、道路隆起**などによって主要道路や海岸沿いの道路がことごとく寸断されて、地元の関係者も容易に現地へ向かうことが出来ず、被害状況や映像の報道が遅れたものとだと考えられます。

地震発生から2日、3日と経つにつれようやく被害状況が見えてきました。道路や家屋は無残にも破壊され、以前は人々が行き交っていた通りや街並みも変わり果ててしまいました。

２９年前の阪神淡路大震災での高速道路が横倒しになった様子や住宅街やビルが建つ街から次々と火の手が上がる映像、１３年前の東日本大震災での襲い来る津波は瞬く間に車や建造物、人々をさらっていきました。その映像がフラッシュバックして、今回の能登半島地震と重なりました。

今回の津波被害も甚大でした。また、「**道路寸断**」は後々の支援物資の運搬や復興の為の資材などの運搬に大きく影響することになり、我々の便利な日常生活が一変してしまう恐ろしさを改めて認識させられました。

地震発生から2週間以上経過した今、ようやく仮設住宅が建設が始まりました。一方では住み慣れた町を離れる人や(2次避難)、家族や親せきと離れて「集団避難」を選択した子共もいます。

今、被災地には無常にも雪が積もりその重みで更なる家屋倒壊も懸念されています。

準備できていますか？

避難するとき持ち出すもの/準備できれば便利なもの

発行元

スズカン株式会社

〒510-0072 四日市市九の城町５番８号

電話 059-351-5131㈹

ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞｱﾄﾞﾚｽ

https://suzukan.co.jp

これからの避難所のあり方

災害のあと、二次災害に怯えながら暫くは自宅や車中、体育館などの避難所で仮の生活が始まります。

しかし、諸外国からは先進国の日本でのこの仮生活に「避難所対策の後れ」があるとの指摘もあります。

諸外国の一例をあげますと、災害時に**家族単位**で**冷暖房と簡易ベッドを完備したテント**が用意され、コンテナ型個室トイレをいくつか設置、更には、コンテナキッチンも完備された「テント村」ができるところがあります。 また被災後、**2、3日以内にテントやトイレの設置が国や自治体で義務付け**されています。食事も各避難所で作ることが必須となっており、１０００食対応できる**大型のキッチンカー**や**料理専門のボランティア団体**もあり、日頃から大量調理の訓練をしているプロの料理人もいるそうです。

日本でも、ようやく**ボランティアでキッチンカー**が被災地に赴いたり体育館などの大きな建物の中で四角いテントを設置している環境がみられるようになりましたが、まだまだ全国で普及している状況ではありません。

避難所そのものが被害を受けている場合も少なくありませんし、屋外で個々のテントを設置する場所も確保できるかどうかも事前調査の必要と時間や作業人員も多く必要になります。

しかしながら、以前から避難所のあり方には多くの問題点が出ており、何より、**心身のストレス**が原因で徐々に病発症へとつながる事例が増加しています。また近年のコロナウイルスなどによる**パンデミックへの対応**が不可欠な事や、**水の確保**が困難な状況が見られ衛生面への不安が増しています。

更には、特に**配慮が必要な方々への対応**にも重要性が高まってきています。(乳幼児、高齢者、障害･慢性疾患のある方･外国人など)

また、最近では避難所内での性暴力など耳を疑うような被害の報告もあります。

避難所に設定されている建物も、本来「避難所」として用意された建物ではないところが多いため、トイレなどの設備管理が「避難所」としてはかなり不十分なところが多々あります。

このように、「地震や津波などで被災することが多い国、日本」としては、災害への備えや避難所のあり方など、まだまだ不十分であると感じます。

多様化する問題点を改善しながら、「避難所」での生活が長期化することを想定し、少しでも快適に安心して滞在できるように各自治体、国単位で早急に改革実行を進める必要があるのではないでしょうか。

自助に努めることの大切さ

常々言われることは、災害時**すぐには救助隊は来ない**、ということです。

被災後、家族や周囲の人々の無事を確認して、先ず自分たちで何とか**生きていくこと**を考えないといけません。

そのためにはやはり日頃から**減災**を心掛け、**備蓄**も必要です。今回の能登半島地震で改めて、**水と食料（最低3～7日分）**の備えは必須だと感じました。

また**保管場所**も考慮する必要があります。家屋倒壊や車がつぶれてしてしまった場合取り出せなくなってしまいます。その他にもあらゆる事を想定して出来る範囲で必要なものを備えましょう。

また、家族でも**災害発生時の連絡方法や行動**、被災後のことなど話し合っておくことも大事です。

避難所生活で困ること

・着替えるところがない　・洗濯物(下着)などの処理(干場ない、洗濯する場所がない)

・のぞき見、痴漢にあった　・女性用品の不足、受け渡し時の配慮

・乳幼児用品の不足　・授乳するところがない（衛生面の工夫）　・寒い/暑い

・成人用おむつなどがない　・ペットと一緒にいられない　・音やにおいの問題

・トイレ不足や不便(洋式トイレ不足・暗い・男女一緒)

理解と配慮が必要な方

・アレルギー疾患、慢性疾患、難病、障害のある方、介護や介助の必要な方

・性的少数者の方

・外国人の方(日本語・災害知識・生活習慣・食事)

・高齢者への方

・乳幼児とその家族

自分たちにできる備え

・最低 2～7 日、の水や食料品と防災用品

・日常どうしても必要なもの(処方薬・めがね・入れ歯など)

・身分証明書(保険証・運転免許証・マイナンバーカードなど)

・古新聞　・ブルーシート　・モバイルバッテリー・スリッパ(運動靴)

・アルミホイル・ラップ・大きなごみ袋（45L 位）・カイロ・冷却剤・充電式扇風機　など

（あれば便利なもの…保管できるところがあれば）

石油ストーブ、ポータブル電源(発電機)、テント、寝袋、　段ボール

（編集担当たより）

2024 年、予想だにしなかった新年の幕開けでした。

前回号(10 月発行)で「災害への備え」のテーマで掲載させて頂いた 3 か月後に震災が起きるとは驚きと恐怖の複雑な心境です。

石川県をはじめ周囲の県では未だ被害の全容ははっきりとせず、安否不明者も増えようとしています。被災者の方々が寒さに耐えながら、また先々への不安を抱えながらの毎日をどんな思いで過ごされているのかと思うと胸がしめつけられます。

いつ起こるか分からないのが災害です。充分な備えと同時に日頃からシミュレーションして、避難所生活など被災後の生活についてもしっかりと考えなければならないと痛感しました。

＊今回は LP ガスに関するテーマではなくて申し訳ありません。